

## N先生

「言語とは何か言ってみろ」

「分かりません……」

「分からないでは済まされん」

「どう説明していいか、よう答えません……」

「お前は『言語学概論』を担当しているじゃないか。答えるのはお前の義務だ」

N先生の詰問は続く。酔いはいつべんにさめた。

「……ソシユールの考えも……」

「ソシユールがどうした」

「……時枝誠記や三浦つとむの考えも……」

その日は新任教員の歓迎会であった。その後の会話がどう進んだかははっきり覚えていないが、始めから終わりまで、しどろもどろであったことだけは確かである。二週間前に着任したばかりの私はその日の主役の人であった。三年間のフランス留学から前年の秋に帰国して、半年後の三月に大学院の博士課程を四年で退学し、四月から広島のある私立女子大学に就職したばかりであった。担当はフランス語五コマと言語学概論一コマであった。歓迎会は型どおりに終わり、数人の先生に誘われるままに行った二次会の飲み屋での会話である。広島県の山奥の加計町ゆかりの人の店とかで、猪料理が売り物の店であった。

その日以来、何十年も教壇に立って言語について講じながら、未だにあの夜の会話から一步も進んでいない。しかし、あの質問に答えられないままの自分が教壇に立ち続けているのだという自覚だけは、心臓に突き刺さったとげのように私の中に居座り続けている。

N先生とは、あれほど厳しい詰問であったにもかかわらず、あの夜の会話以来、妙に格別な親しみを感じ、先生からも常に格別の高配に与っている。あるとき先生の研究室を訪ねた。図書館のカードボックスのような細長い手製の箱が、両側の壁にも部屋の中央の棚にも上から下までぎっしりと並んでいる。それらの箱は特別注文でわざわざ作ってもらったものだそうである。各々の箱の中には、何百枚ものカードが詰まっている。日本語学が専門の先生が何年もかけて収集された用例のカードである。気が遠くなるようなその営為に新米の私は圧倒された。

その女子大には五年しか勤めなかったが、退職後も機会あるごとに、気の合った者同士の酒席に同席させてもらっている。話題は研究のこと、大学のあるべき姿、その他の世間話など多岐にわたり、いつもその会話を肴に美味しい酒を飲ませてもらっている。切支丹語学の泰斗土井忠生先生のこと、時代別国語辞典、室町時代語編集で土井先生を援助し続けられ、『日甫辞書』を翻訳された森田武先生のこと、方言学で独特の分野を開拓



2007  
み路

御波

された藤原与一先生のこと、仲間と設立し、学会活動では最も熱を入れておられる様子の日本表現学会のことなどである。

土井先生のお宅には一度伺ったことがある。日本学術会議の招きで、フランスの碑文文芸アカデミーを代表して一九八二年に来日されたロマン語文献学者のフェリックス・ルコワ教授に同道してであった。土井先生の恩師で『広辞苑』の編者新村出氏の長男で土井先生の幼馴染みでもあったフランス文学者の新村猛先生が、東西の文献学の泰斗の会談を企画されたものであった。仙人のような風格で訥々と話される土井先生と、一九世紀以来のヨーロッパ文献学の伝統を一身に受け継ぎ、『ロマニア』誌の編集長など大きな仕事をなされてきたルコワ先生との会話は、そばで聞いているだけで、学者というのはこのような人たちのことを言うのだとつくづく感じさせられたものである。

そのような学風の息づく教室に連なってはおられるが、N先生はいろいろな意味で型破りなところがある。無精髭を生やし（実際にはかなり手入れはされているようであるが）、構内ではいつもサンダル履きで、Vシャツやネクタイなどには縁がなく、何事にも動ぜず、つねに泰然自若である。

そのN先生が、いつになく鬚を剃りネクタイをしめているのではないか。実はその日は中間卒業式の日であった。中間卒業とは、通常のように年度末の三月ではなく、前期末の九月に卒業することである。大学を四年ではなく、五年・六年かけて卒業する者が珍しくないような国立大学や男女共学の大学なら特別なことではなく、まして今のように秋期（一〇月）入学の制度も増えれば、なおさらそうである。しかし当時の女子大学にあっては、四年で所定の単位を揃え、三月に卒業する者が圧倒的であり、中間卒業する者は、どうしても単位が不足して、やむを得ず半年遅れて卒業せざるをえなかった者たちであった。教師の側からすれば、自分が不合格点をつければ、その学生の卒業が半年遅れることを承知で不合格点をつけなければならない。

その大学では卒業生は全員黒いガウンを着て式に臨む。その日卒業する学生は二・三人であるが、やはりガウンを着て、広い講堂ではなく、狭い会議室で院長から卒業証書を受け取っている。「螢の光」の演奏もない。列席している教員も数名である。彼女たちも、一緒に入学した同級生と同じように、三月に、全員出席の教職員や保護者も見守る講堂での卒業式の中で、卒業証書を受け取らなければならない。同級生から落第生、劣等生と見られたことをどれだけ恥ずかしく思ったことか。そのような思いをさせるかさせないかは、この自分（N先生）が彼女の試験やレポートの成績に不合格をつけるか否かにかかっている。それを承知の上で、彼女が半年遅れて卒業することの方が、彼女にとつてよりよいと判断し、不合格をつけたのである。しかし、その時点では賭けであった。彼女が屈辱感に耐えられず挫折し、卒業せずに退学するかも知れなかったからである。それがその日見事に単位を揃えて卒業の日を迎えたのである。その彼女への満腔の祝意を表したのが、剃ったことのない鬚を剃り、しめたことのないネクタイをしめ、サンダルではなく靴を履いているN先生のその日の姿であった。

N先生は山林や畑を所有している。ある日、畑を荒らす狸を見つけ、鍬を振り上げて追い掛け回した。側溝に入り込んで逃げて行く狸は突き当たりでとうとう逃げ場が無くなった。しめたつ、と思ったN先生が鍬を振り降ろそうとしたその途端、万事休してN先生の方に顔を向けた狸と目が合った。その何とも言えない純粹無垢な目を見て、怒り狂っていたN先生の体から全身の力が抜け、振り上げられた鍬は音も無く地に落ちた。

（二〇〇四年九月）